

男女間の不平等

大津 隆文

先月のある朝、妻から「今朝の新聞のあの記事見た？」と尋ねられた。文化欄の作家井上荒野氏のエッセー「ニュー夫誕生」（日本経済新聞26・8・2）で、内容は夫が週三日料理を作ってくれ、冷蔵庫の卵やトイレットペーパーの残数も分かっているニュー夫になり、あらためて新婚生活が始まっている、との幸せ感溢れるものだった。羨ましそうな妻の顔を眺め、私は返す言葉がなかった。

わが家でも妻から「料理を全くしないけどもし私が先に逝ったらどうする？せめて週末のお昼くらいは自分の分は自分で作ってみない？」と言われていた。私の周りにも料理が得意で家庭で腕を振るっている男性がいるが、とても真似をする元気はない。いくら頑張っても妻より美味しい料理を作るのは不可能だ。現状では私準備のお昼で最も多いのは蒸し鶏、これが一番簡単で美味しいと思っているが、妻はただ呆れるばかり。

私達の世代は「夫は外、妻は内」という役割分担の観念が染みついている。仕事からリタイアした時、自分の役割はなくなったが、心中、結婚時の暗黙の契約は一生有効と強弁した。ただし近頃は、決まった時間に食卓に座れば料理が待っており、食事後私がソファでテレビを見ている時に妻は食器洗い等をしている、という状況に申し訳ないと心の中で手を合わせているが。

最近友人が「少子化考」を書いたと一文を送ってくれた。彼は「男女間には妊娠、出産、育児（授乳）について過重な負担の格差」があり、さらに男女間の役割分担への旧い意識、慣行が残っている（代表例が大相撲の土俵、女性天皇）、女性の社会参加の劇的变化にも関わらず、出産費用の無償化とか男性の育児休暇などではカバー出来ない女性のキャリア中断の不利をどうしたらいいのか、と指摘。こうした問題への女性側からの回答が少子化である、とする。

誠に卓見だと思う。そうは思うものの最も身近な不平等是正の行動が実行出来ない情けない自分、少し長生きし過ぎたのであろうか。